

Judgement for cycling competitions



松本建設事務所建築課 岩間光輝



- We are same Aisian !
- 共通語の「英語」の必要性
- スイスでUCI エリートナショナル・コミッセール取得 (2018年)



東京オリンピック・
パラリンピック2020で
の貴重な経験



「緊張感」



「出会い」



2022全日本選手権トラックレース
(スターター・コミッセルパネル)

2019年 茨城国体 (審判長)

© Kazutaka Inoue

1 スライド①

- 2021年に開催の2020東京オリンピックの自転車のトラック競技終了後に撮影した審判団の全体集合写真です。（場所は、伊豆市にある伊豆ベロドロームです。）競技が無事終了し、皆一様に安堵の表情で写真撮影です。後ろ側のジャケットを着た人たちは世界中から集まったUCI（世界自転車競技連合）指名の国際審判員です。私を含めたジャケットを着ていない人たちは、UCIが公認し、オリンピック組織委員会から国内審判員指名を受けた審判員です。実際には、この中に香港人2名、マカオ人1名、韓国人1名が含まれています。趣味を通じた私の大事な友人達です。私は、実際2020東京オリンピック・パラリンピックのロード競技及びトラック競技の全日程に参加（全日程参加できたのは、日本人では私を含めた二人だけです。）させていただき、人生で二度と体験できないことを体験することができました。
- 今回の経験は、職場の理解がなければ参加はできませんでしたし、職務免除の制度も新たに作っていただきました。関係いただいた方に、大変感謝しています。

2 スライド②

- 国内大会で多くの経験を積み、（公財）日本自転車競技連盟の資格試験を受験し、2015年に国内最高グレードの1級公認審判員（ロード・トラック）を取得しました。その後、2018年にスイスで行われた世界自転車競技連合（UCI）開催の資格試験「エリートナショナルコミッセル（トラック）」を受験し、合格することができました。この時に、趣味を同じにする世界中の仲間に出会い、資格試験の講義を受講するという貴重な体験をしました。この写真の中には、その後インターナショナルコミッセルの資格を取得し、あの有名な「ツールド・フランス」等の審判で活躍している仲間が居ます。
- この時の初日の講義で、講師からの質問に英語がわからずに「ポカーン」としていた時に、カザフスタンのエレナ（写真中央のブルーアイの美女）が私に救いの手を伸ばしてくれて、「講師はこういうことを聞いているのよ。」と後ろを振り向いて教えてくれました。それで何とかその場を凌ぐことができました。後で彼女と話をした時に私に言ってくれた言葉は、「We are same Asian!」です。とても嬉しかったです。今でも彼女とはFacebook友達です。この時、「英会話力の必要性」を、とても感じました。

3 スライド③

- 東京オリンピック・パラリンピックでは、大変貴重な経験ができました。左上の一番大きな写真は、個人タイムトライアルのスタート台で写した1枚です。
- オリンピック・パラリンピックという大舞台で、大変大きな緊張感のなか、審判に当たっていました。正直、国際審判員との言葉の壁でコミュニケーションが上手くいかず、毎日ストレス状態でした。そんな中でも、新しい出会いがありました。一番上の右側の肩を組んでいる写真はスロベニアの「ピーター」です。彼とはパラリンピックのトラック競技でバイクインスペクションを担当しました。最初は食堂であって挨拶しても返ってきませんでした。その後大会会場で審判をしながら話をすると、歳が近く、オーストリア（スロベニアの隣国）にCLTの勉強に行ったこと等を話していたら大変仲良くなりました。朝食で納豆を食べてみてと勧めたら、気に入った様子で笑いながら食べていました。大会終了後、一緒に写真を撮ろうと言ってくれました。彼はロード競技のスロベニアのナショナルチャンピオンだったそうで、これからは自転車の国際審判で活躍していく人だと思えます。
- その下は、香港の「シーン」とロード競技のスタート会場で、ぶらぶら。だいぶ年下ですが、良きアジアの友達です。また、一番下の左の写真は「片山右京」さんで、ロード競技の責任者でした。この大会を通じて、片山右京さんに私を知って貰うことができました。右下の写真は、オリンピックのチームパーシュートのデンマークチームの出走直前に様子で、私がホルダー（スタンディングスタート前の選手と自転車を支える）をしました。全世界にこの様子が放映されていると思えます。

4 スライド④

- 2019年茨城国体では、予定していた方が急病にかかり、大会2週間前に突然自転車競技の審判長の依頼を受けました。生きた心地のしない約1週間でした。（左側の2枚の写真）
- 2022年のトラック競技の全日本選手権でコミッセルパネルとして参加しました。スターターを担当しました。（右側の写真。知り合いが撮影して送ってくれました。）

5 この様な貴重な経験ができたのは、長野県職員だからだと思います。大変感謝しています。この経験を、これからの長野県の「チェンジ」に活かしていきたいです！